

はじめに

日頃より九州工業大学アイスホッケー部の活動に関しまして、温かいご支援をいただき、部員一同心から感謝いたします。

また、今回初めてアイスホッケー部の存在を知った方もいらっしゃると思います。ここで、私たちアイスホッケー部の紹介をさせていただきます。



冬季は西日本総合展示場に開設される北九州アイススケートセンターで練習を行っています。なんと、本会場は例年、九州工大アイスホッケー部の部員たちが設営・解体のお手伝いをさせていただいております。自分たちの手で造ったアイスリンクで猛特訓をしています。

また、月1回の頻度で他大学や社会人チームと練習試合をしています。

九州工業大学アイスホッケー部は、1982年に創部した歴史ある部活動です。現在はプレーヤー18人、マネージャー4人で活動しています。現プレーヤーは、全員がアイスホッケーどころか、スケートの経験すらない、完全初心者でのスタートでした。週1回の氷上練習に加え、週2回の陸上練習を行い、技術や体力を強化しています。

氷上練習は通常、飯塚市内にあるスケートリンクを利用させていただいています。



フェイスオフにて試合開始1番ドキドキする瞬間です

アイスホッケーとは他競技と異なり、大学から始める人が圧倒的に多い競技です。「氷上の格闘技」と言われるように、激しいぶつかり合い、陸上では味わえないスピード、そして、自身やチームのレベルアップを何より感じる事ができます。ゼロスタートが多いので、練習するほど技術が向上し、できることが増えていきます。「切磋琢磨」がこれほど似合うスポーツは他にありません。

試合は、1ピリオドあたり15分を3回行います。ゴールキーパーを含

下剋上チーム

一昨年のチームは、プレーヤーがわずか10人しかいませんでした。しかも、スケートは様になったものの、まだまだ戦う技術はない当時1年生

めて6人で構成され、22人がベンチ入りすることができます。試合中の選手交代は自由で、何度でも行えます。体力の消耗がとてもしんどいスポーツのため、選手数が多く、交代がたくさんできる方が有利とされています。そんな競技に惹かれ、チームの成長と勝利にこだわる私たちが、決して順風満帆ではありませんでした。



激しいぶつかり合いのワンシーン

きつと応援したくなります！

アイスホッケー部マネージャー 横山 未来 (建築3年)

アイスホッケーとその魅力

もいたため、主戦力となって戦える人数はわずか8人と、交代がほほいなく中で試合に挑みました。当然スタミナ切れになり、大きな得点差での敗戦、無得点試合など負けが続いていました。

いわゆる、弱小校です。

先輩が引退されてからのチームはたったの7人と、試合に出場することもぎりぎりの状態でした。



メンバー数7人時代  
(2023年春)

誰かが怪我をすれば試合はできなくなり、ひたすらに基礎練習を積み重ねました。冬は小倉で全体練習と個人練習を行い、アイスホッケー漬け

の日々を送りました。中には、年末年始も休まず毎日通い続けた猛者もいたようです。



猛者の1人  
今では頼れる  
キャプテンです

地道な練習を重ね、新体制後の初公式戦では、格上相手に粘り強く戦い、公式戦初勝利を飾ることができました。勝利の喜びを仲間と分かち合ったその試合は、私たちの原動力となっています。



得点が決まり喜ぶプレーヤー

これからは勝てるチームになりたいて、一層練習に励み、勝利に貪欲になっています。

そして、昨年秋のインカレ予選で快進撃を遂げます。1次リーグを、3勝1敗1分で終え、上位トーナメントに進出しました。しかも、得失点差わずか1ポイント、私たちチームが上回っての進出でした。まさに「運も実力のうち」です。悔しくも結果は第4位でインカレ出場とはなりませんでしたが、確実に成長していると全員が実感した大会でした。



みんなで守り、攻める

勝利はできたものの苦しい試合は多く、その中の勝利をミラクルと口にした時もありました。そう思うことで、自分たちの力を過信しすぎず、地に足をつけて戦えたのかもしれない。

そして、この快進撃は自分たちだけでなく、周りにも驚きを与え、「ジャイアントキリング」と言われました。

そんな私たちも、さまざまな試合で勝利を重ね、ジャイアントキリングと言われなくなるまでに成長しました。

## 6人の集大成

今年度は、5人のプレーヤーと1人のマネージャーがラストイヤーを迎えます。コロナの影響もあり、彼らには1学年上の先輩がいませんでした。本来であれば、基礎が身に付き主力になる3年次に、先輩とプレーをし、戦術や技術を学びます。しかし彼らは、試合で通用する力を習得したところ、自分たちが最上級生となってチームを牽引しなくてはなりません。まだまだヒヨコの下級生たちをまとめ、勝つチームを2年かけて作り上げました。

ときには、チーム内で方針が確立しなかったり、メンバーが欠けそうになったりしましたが、今では、「インカレ出場」という目標に向かって、全員が同じ方向を見て、日々励んでいます。

## わずか7人が18人へ

先ほど述べたように、一昨年までは、たった7人で試合に出場してい



18人になったチーム  
夏合宿にて撮影(2024年)

ました。練習も少人数だったので、寂しかったことを覚えています。

ところが、私の一つ下の代(現2年生)は6人、そして今年は5人の仲間を迎え入れることができました。

2年生はチームの戦力にまで成長し、チーム全体の活気が向上しました。1年生は、入部して半年足らずで見違えるほどの成長を遂げています。中には、2年生とポジション争いのできるまで成長した新入部員もいるほどです。

たった7人のチームが、2年足らずで倍以上の人数に増え、数だけでなくチームの力も大きくなりました。

### マネージャーだからこそ

彼らの成長や目に見えない努力は、本人よりもマネージャーだからこそ気付けると思います。先輩や同期の成長はもちろん、下級生の上達が目に見えてわかります。

入部当時は、小鹿のように震えながら氷上に立ち、立ち上がっては転びを繰り返した彼らが、ものすごいスピードで走りながらパックを操る姿に感動します。

私は長年、個人スポーツを経験し、誰かのサポートをするマネージャーになることなど考えられませんでした。今でも周囲の人に、「誰かのために働くのはすごい、私にはできない」と言われますが、働いているという概念はなく、夢中になって共に戦っている気分です。

そんな私たちマネージャーができることは限られています。

私は今、九州工大アイスホッケー部を多くの人に知ってもらい、応援していただくため、SNS運営や試合のライブ配信を行っています。また、大事な試合前にはマネージャー全員でお守りや応援動画を作製しています。



過去に作成したお守り

しかし、九州工大アイスホッケー部の一番の問題点は、資金難です。現在、明専会の皆さまやアイスホッケー部OBの方々から寄付金をいただき活動ができています。誠にありがとうございます。

しかし、アイスリンク使用料の工面が難しく、週1回の氷上練習がやっと、というところが現状です。また、代々受け継いできた防具や練習道具の部品も古くなり、買い替えが必要になっています。プレーヤーにとって不自由なく、十分に練習が行える環境づくりの手助けをすることがマネージャーにできることの一つだと考えています。

まずは、九州工大アイスホッケー部の存在をもっと知ってもらうことが大切だと考え、ホームページやSNSでの発信、学校を通じて行われる部活動キャンペーンなどにこれからは積極的に参加していきます。ぜひ皆さんも「九州工業大学アイスホッケー部」と調べてみてください！

アイスホッケーという競技と私たちチームに興味を持っていただけたら嬉しいです。

### やっぴん

マネージャーとしてチームの一員に迎え入れてくれた部員たちに、感謝を伝えたいです。本人たちを前にすると調子を狂わせるので言いませんが、氷上で暴れまくり、輝いている彼らは最高にかっこいいと思います。

そして何より、ここまで九州工大アイスホッケー部が成長できたのは、皆さまのご支援のおかげです。改めて感謝申し上げます。

今後とも変わらぬご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。



お気に入りの1枚